

## 北海道選抜チームの取組を振り返って

～第22回都道府県対抗ジュニアバスケットボール大会2009を終えて～

男子アシスタントコーチ 室蘭市立向陽中学校 浅田慎市

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」(戦いにおいて、天が与えてくれた絶好の機会を得たとしても、地理的条件の有利さにはかなわない。だが、どんなに地理的に有利でも、人心がしっかりしている相手にはかなわない)。

北海道選抜チームが始動した1月25日のミーティングの中で、ヘッドコーチであります札幌市立厚別北中学校の高橋和也先生が12名の選手に送った言葉です。この言葉を実践できる12名を何度も話し合いを重ねて選出したこと、そして、北海道を代表する選手としてここにいることにプライドを持って、約2ヶ月の北海道選抜チームの取組を大切にしていこう、高橋先生から話がありました。

ふり返ってみますと、2008年10月に行われた第一次合宿の時から、今回の北海道選抜チームは「全国三連覇」を目指し、その重圧に十分堪えうる選手であることが何よりも求められる条件の一つでした。この合宿の前半は、エンデバー伝達講習会が組み込まれており、限られた時間の中での選考の場となりました。しかし、重圧をはね除け強い気持ちでプレーができることや、気配りのできるプレーが求められること、また、常に気配を感じて行動したり、プレーに集中することを大切にできる選手を選考することに、私たちスタッフも

真剣に取り組ませていただきました。

その後、12月末の南大会・北大会を勝ち抜いたチームが集結する決戦大会旭川大会に私たちスタッフも集合いたしました。昨年度の北海道選抜チームのメンバーの中にも、この決戦大会において、素晴らしい活躍を見せ、メンバー入りを果たした選手たちの話を高橋先生から伺っていただきましたので、どの試合も見逃すことなく、観戦させていただきました。

やはり、この4月に行われます北海道カップ出場の切符を手にした札幌市立中央中学校の志村三兄弟（時宗くん、正宗くん、高宗くん）の活躍、帯広市立緑園中学校のビックセンター仁平くんの動きの早さとリバウンドの強さ、そして、恵庭市立恵明中学校のポイントガードの村田君、センターフォワードの石川くんの試合経験豊富な冷静なプレーは、大変目立つものでした。

1月16日から18日までの3日間、秩父別にて、第二次合宿を行いました。この合宿の中心は、昨年度全国制覇を成し遂げた「2-2-1ゾーンプレス」のシステムをどれだけ理解し、自分の持ち味をコート上でどう表現できるかでした。強化委員会の先生方や、自分のチームの選手が参加している顧問の先生方が沢山応援に駆けつけてくれていましたので、その先生方に、一つずつチームを担当してもらい、ゲーム練習のお手伝いをいただきました。チーム編成のポイントの一つは、志村三兄弟の中で、うまく機能する選手の選考。そして、志村三兄弟のいるチームに対抗できるチームの編成でした。沢山のゲームを通して、それぞれの選手の特性を理解していくことは、私にとっては、大変貴重な経験をさせていただいた時間の一つでした。どの選手もシュート力があり、自分のエリアでの成功確率はかなり高いものでした。しかし、どうしても、ドリブルから自分のタイミングを作り出した中からのシュートが多かったです。折角のシュートセレクションを逃してしまう場面や、マンツーマンディフェン

スを激しく守れないこと、そして、リバウンドボールをしっかり保持し、次の展開へ素早く移行できないところなどの課題を個人的には感じました。

12名の選手を選考するのは本当に大変な作業でした。4番、5番の選手を厚くして高さをいかしたバスケットボールを追究していくには、あまりにも、ガード陣が手薄になること。あるいは、3番選手を厚くしても、全国の舞台では、自分たちのオフェンスリズムが崩れてしまった時には、なかなか立て直しがきかなくなる不安があることなど、問題解決を探りながら話し合いを進めました。最終的には、相手の堅い守りを突破でき、ゲームメイクを冷静にこなしていけるポイントガードを補強することと、どんな環境においても、自分たちのバスケットボールをやり通していけるチェンス&ムードメーカーを補強することで、今年の12名が選ばれることとなりました。

高橋先生は、北海道選抜選手としての心得を次のように話してくださいました。

- ・選抜チームを単独チームと思うこと ～このチームにかける熱い思いをもつこと
- ・厳しく、明るく、元気よく ～厳しい状況に前向きに取り組み、行動すること
- ・周囲への気配りを忘れない ～選考に落ちた人の気持ち、送り出してくれる人の気持ちや配慮を忘れないこと
- ・頭で理解し、身体で表現しよう ～粘り強く工夫してトライすること

この北海道選抜チームは、常にこのことを意識して過ごしてきました。

2月14日（土）～15日（日）山形市で開催された東日本大会に参加してきました。出発前に、東海第四高校と平岸高校と練習試合をさせていただき、ゲームを重ねるごとに、選手一人ひとりが2-2-1ゾーンプレスのシステムを理解し、その都度浮かび上がる課題を整理しながら、山形遠征を迎えました。

初戦の相手は福島選抜。初めての公式戦の堅さやレフリーとの判定基準のズレになかなか自分たちのバスケットボールが適応できずに、苦戦を強いる形となりました。後半に入り、プレスからの速攻が思うように決まりだし、また、今年の北海道選抜チームの武器でもある3ポイントシュートも随所に決まり、**61-53**で、無事に初戦を白星でスタートすることができました。

次の相手は岩手県選抜。初戦で負傷してしまった鈴木光穂くんが病院へ行くという心配事を抱えながらの状態ではありましたが、全員得点を成し遂げるなど、全く岩手県選抜に自分たちのバスケットボールをさせる間もなく、**68-36**で快勝することができました。

大会初日最後の相手は、宮城県選抜でした。過去においては、何度か北海道選抜チームも負けてしまったこともあるくらい油断できない相手であると、高橋先生からも注意があったおかげもあり、北海道選抜チームの勢いが止まることはなく、**86-43**という未だかつて無い点差をつけ勝利し、3戦3勝で一日目を終了しました。

大会2日目の初戦は、山形県選抜。地元ということもあり、ギャラリーには沢山の山形応援団がいました。プレスもしっかりと機能し、内容も悪くはないのですが、中々思うように点差が開かず、最後まで、山形県選抜は、粘りを見せていました。**73-60**で4勝目を挙げました。

東北遠征最後の対戦は、秋田県選抜でした。秋田県選抜は、選手交代をほとんどせず、北海道戦に懸ける思いが終始伝わるチームでした。折角、ゲームの主導権を握りながらも、シュートが単発になったり、目の前のリバウンドボールを相手に奪われてしまうような時間帯が後半に訪れ、苦しい時間帯が続きました。この場面こそが、ヘッドコーチ高橋和也先生が選手一人ひとりの特性を理解されている瞬間の一つでした。ゲームの流れを一気に変える選手起用で、見事、秋田県選抜の勢いを封じ込め、**61-51**で逃げ切り、昨年に引きつい

て、東北遠征全勝という素晴らしい成果と、三連覇へ向けての大きな自信を得ることができました。

その後の取組は、石狩選抜や札幌選抜との練習試合を行いました。そして、旭川遠征で旭川工業高校や旭川選抜と対戦したり、U-18の強化事業で札幌に来ていた旭川西高校とも練習試合をさせていただきました。全国大会出発前の最後の3連休では、日帰りでの室蘭遠征で海星学院高校や室蘭選抜と対戦し、そして、恵庭南高校にも胸を貸していただきました。最後の練習試合の相手は、大麻高校との対戦でした。

短期間での内容の濃い試合を通して、システムがより精度を増していく、2-2-1プレスからのマッチアップゾーンは、今年度も北海道選抜チームとして、しっかりと形づけられ、全国の舞台への出発となりました。

予選リーグの会場は埼玉県上尾運動公園体育館でした。私たち北海道Aリーグの初戦の相手は熊本県選抜でした。前日の都内の移動や今朝の通勤時間帯での移動で、北海道ではなかなか体験できない環境の中で、いかに、普段通りの自分たちに戻れるかがポイントでした。アップできるスペースも限られていました。しかし、選手達はいつも明るく、そして、初戦に対するモチベーションを高めながらゲーム開始を待っていました。東北遠征で見せたような硬さはほとんどなく、ここまで北海道選抜チームが積み上げてきた2-2-1プレスから、相手チームの攻撃リズムを狂わせ、第2クォーターが終了するまでには12人すべての選手がコートに立ち、それぞれ、自分のやるべき仕事に集中して取り組むことができました。終始北海道ペースでゲームが進み、83-46で好発進することができました。

予選2試合目は、栃木県選抜でした。事前のスカウティングの情報も選手達

には伝えましたが、あくまでも、ここまで来たからには、北海道のバスケットボールをやり通そう、これこそが、選手達の気持ちを落ち着かせ、自分たちの取組に自信をもたせる何よりの言葉がけであることは私たちスタッフの共通理解でありました。チームを勢いづける3ポイントシュートもどんどん決まり、途中、相手のリズムに合わせてしまうところもあって、失点が多くはなりましたが、気がつけば、88-58で快勝しました。明日からの東京体育館でのゲームを目前に、この北海道選抜チームが、さらに、本当の単一チームのようなまとまりを強めていくことを実感しました。

私自身も初めて訪れた東京体育館。札幌市にある道立体育センター（きたえる）よりも観客席数や天井の高さも違い、そのスケールの大きさや施設の充実さに、ただただ驚くばかりでした。しかし、3連覇まで、残り4勝となった私たちに、その感動に浸る余裕などはありませんでした。アップ会場をすぐ視察し、テーピングサービス会場を探したりと、選手達がすぐにゲームに集中できるよう準備に入りました。

決勝トーナメント1回戦の対戦は新潟県選抜。これまで通り、立ち上がりからゾーンプレスからのプレッシャーをかけ続け、新潟のオフェンスリズムを崩すことに成功しました。特に、第2クォーターでは、新潟の得点を2点に抑えたディフェンス力に選手達の成長の速さを感じました。この大きくついてしまった点差では、全国の舞台と言えども、とても追い上げるようなゲームにはならず、安心したゲーム展開で、初戦を突破しました。

残り3勝に迫った準々決勝（ベスト8）の相手は、埼玉県選抜でした。気がつくのと、どのコートよりもベンチサイドに沢山のコーチや役員の方々がおり、このゲームの行方を見守る数の多さに驚きました。さらに、埼玉県ベンチサイ

ド後方には、沢山の応援団。緊張するなどと言っても、まだまだ中学生。多少不安そうな表情の選手もありました。しかし、これまで、常に、アウェーの中で、自分たちのバスケットボールを信じ、自分たちのできることを全力で行い、自分の力を出すことに集中することを高橋先生は選手達に言い聞かせてきたので、ゲーム開始直前には、いつも笑顔と自信が溢れた北海道ベンチとなっていました。高橋先生が常に選手達に伝えてきた言葉の中に、「見ている人が感動できる試合を」があります。ただ強だけの試合ではダメであり、見ている方々が感動できる試合をいつもしていくことを心がけていくことです。もしかすると、この埼玉戦こそが、今年の北海道選抜チームの最高の試合であったかもしれません。

埼玉県選抜は、志村三兄弟の二人にトライアングルツーディフェンスを仕掛けてきました。普段接することのない相手チームにとってみると、どの二人にマッチアップをしていくのか、戸惑うはずです。実際このゲームも埼玉は戸惑っていました。このレベルになると大きな点差を奪いながらリードするゲーム展開はあまりありません。逆に、タイムアウトやピリオド間の限られた時間の中で、要点を絞り、選手に理解をさせることの大切さを間近で感じました。近況を絶えず分析しながら、タイムアウトの取り方、そして、選手起用のタイミング等、ヘッドコーチ高橋先生はゲームが盛り上がりを見せれば見せるほど、冷静にゲームの展開を予測しながら、ゲームの指揮をとられておりました。この時間を共有できたことは本当に私にとって、言葉では表せないほどの貴重な体験でした。もし、自分だったらどうゲームを進めていけるのか、今、振り返れば振り返るほど、ヘッドコーチの責任の重さを痛感せずにはられません。

前半を27-26でリードした北海道選抜チームでしたが、後半開始まもなく、4点差をつけられて苦しい場面もありました。しかし、このピリオドでの

高橋先生の選手起用が、再びズバリ的中しました。これまでも、チームの流れを大きく変えるマッチアップの申し子とも言うべきチェンスメーカーの大久保くんが大活躍を見せ、一気に10点差まで広がるゲーム展開となりました。4ピリオドに入り、埼玉選抜も最後まで、素晴らしい闘志を見せてくれました。途中、同点に追いつかれるような場面もありましたが、得点が止まりかけた北海道選抜チームのオフェンスに再び火をつけてくれたのが、ポイントガードの村田くんのドライブからの得点でした。これまでもチーム一丸となって一戦一戦を大切に勝ち上がってきた北海道選抜チームですので、そのまま一気に埼玉県選抜チームの勢いを止め、56-45で、準決勝へコマを進めました。着替えを済ませ、帰る頃には、目標としていた、東京体育館メインコートも中央に設置され、選手たちと共に、明日は、あのメインコートで高橋先生を胴上げしてあげようと決意を新たにしました。

最終日準決勝（ベスト4）の相手は、当初の予定通り、福岡県選抜でした。ここまで来ると、予想以上に選手の疲労も溜まっていましたが、あと2勝することだけを考えている選手たちには、いつも通りの明るさがあり、しっかりと自分たちのアップに集中をしていました。最後の最後まで、高橋先生が常に言われていた「自分たちのやるべきことをしっかりとやる」ことに集中できていました。もちろん、自分のためではなく、応援してくれる人のために、一生懸命努力してきた仲間のために頑張れる人であり続けようとする、そんな選手の集まりが北海道選抜チームであるということは、言葉をかけなくても、選手一人ひとりの顔つきや行動に溢れていました。

準決勝が始まりました。お互い、なかなか先取点が取れずにゲームが進みました。いつもに比べて、外角からのシュートのブレが気になるような感はある



ましたが、それでも、16-13の3点リードで第1ピリオドを終了しました。不安が的中しました。これまで安定していた北海道選抜チームの武器である3ポイントシュートがなかなかリングを通過しなくなり出すと、ハーフコートでのマッチアップゾーンにも少しずつ勢いが無くなりだしてきました。次のパスを予測して動くはずのゾーンの足が止まり出しました。26-33と、7点リードされての苦しい展開で前半が終了しました。

後半に入り、センター仁平くんがゴール下のあわせのプレーやリバウンドにも必死に頑張ってくれました。しかし、今までなかったようなパスミスや相手のプレスディフェンスに対して、ガード陣がなかなかゲームをコントロールできない時間帯が多くなり、福岡県選抜のリードがさらに広がってしまいました。

第4ピリオドは、持ち前の北海道選抜チームのディフェンスのプレッシャーをかけ続けて、攻撃のきっかけを創り出そうと頑張りましたが、最後のシュートまで持って行けないミスが多く出てしまいました。最後のホーンがなるまで、北海道らしさを出し続けた12人でしたが、残念ながら、45-69で、全国第3位という結果で終わってしまいました。

今回初めてこの仕事に携わらせていただき感謝の気持ちで一杯です。強化委員会の先生方の仕事を手伝わさせていただき、その仕事の大変さを目の当たりにしました。どの先生方も自分のチームがありながら、北海道選抜チームのために、お力添えをして下さっていました。

日本一を目指す素晴らしい選手たちとスタッフの先生方とこの時間を共有できたことは私にとって、生涯忘れることのできない財産となりました。

高橋先生が話して下さることの多くには、常に、全国で勝ち上がるためには、

今、何が必要なのか、何が求められているのかのヒントが沢山含まれています。全員で掲げた「全国三連覇」という目標にそって、選手の実情に照らし合わせた話が次から次へと溢れ出てきます。

この北海道選抜チームの取組に対しても様々な角度から、三連覇を捉えていたと思います。例えば、食事の取り方を含めた栄養学の観点からの話もありましたし、また、全国という緊張感が高まる舞台上でのメンタルケアの観点から、呼吸法についてもふれて話されていました。そして、選手の思考の特徴をつかむために、自分自身のことを自分の言葉で表現させるようなコミュニケーション能力の向上にもふれた取組も行っておられました。

もちろん、当たり前のことですが、どのスタッフよりも選手との対話を大事にされており、常に、選手と言葉を交わし、コミュニケーションをとることを優先させていくことを身をもって示して下さいました。そういった取組を通して、常に、選手の内面を把握されていることも学ばさせていただきました。

このことこそ、私たち指導者が最も大事にすべき原点であり、すぐにでも始めていけることの一つなのだと再認識いたしました。

最後になりますが、この大会を迎えるにあたって、沢山の方々から多くのご支援をいただきました。北海道バスケットボール協会の皆様、北海道ジュニアバスケットボール連盟の皆様、12名の選手をバックアップして下さいました各学校の顧問の先生方、そして、快く、練習試合を引き受けて下さりました高校の監督の先生方や選手の皆様、本当に心から感謝申し上げます。また、常に、選手たちのそばで温かく見守って下さった保護者の皆様のご理解とご協力をいただけたことに対しましても、この場を借りて感謝申し上げます。

今後も、強い北海道を作るために、多くの方々と知恵を出し合い、追求して

いきたいと考えております。

この素晴らしい時間を共有させていただきました高橋和也先生、山田秀剛先生、山田明には、本当に言葉では表せないほどの気持ちで一杯です。

大変拙い報告となりましたが、皆様にお礼を申し上げ、報告とさせていただきます。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会